

(二十二) 承前

「はい……」

富が、そう言つて様子をうかがうように、仁左衛門を見た。

「持つてきなさい」

仁左衛門は、うなずいてそう言つた。

富が立ちあがつた。

富は、すぐにもどつてきた。

手に、赤い布に包んだものを持つてきた。

遊齋の前に座して、両手でその赤い布に包んだものを畳の上に置き、指先で前に押し出した。

「こちらでございます」

遊齋がその包みを持ち上げて、赤い布を開くと、中から赤い櫛が出てきた。

赤い漆が塗られた木製の櫛で、螺鈿で桜の模様が入っている。

「なるほど……」

遊齋は、それをしげしげと見つめ、

「この櫛を、二、三日、お預かりしたいのですが、よろしいでしょうか——」

今度は、富にではなく、仁左衛門に向かって言つた。

「それはかまいませんが、どうして……」

「今度のことについて、何かわかるかもしれません……」

「何か？」

「ええ」

遊齋がうなづく。

「どうして、この櫛がしばらくなくなっていて、何故、もどってきたのかという、そのようなことがです」

「それが、今度のことと、どのような関係が——」

「調べてみてからですね」

遊齋の言葉は、いちいちが謎めいている。

「しかし、遊齋先生、調べると言っても、何を、どのように……」

これは、遊齋の横に座している間宮林太郎まみやりんたろうが問うてきた。

「まあ、色々方法はありますが、神よせでもいたしましょうか」

「神よせ？」

「この櫛に神をおろして、色々お訊ねするのです……」

「ほう!？」

「まあ、ひと晩もあれば、なんとかはなるでしょう」

「ひと晩？」

「どこそ、人気がない社やしろにこもらねばなりません……」

「社とな——」

「根岸のあたりに、おきつねさんと呼ばれる稲荷がござりましたね」

「ええ、確かに——」

「あまり大きな神が降りてこられてもこちらがたまりませぬ故、あの稲荷であればほどがよろしかろうと……」

「あそこなら、まわりは畑じゃ。社にも人はおらぬ」

「勝手に使いますが、よろしゅうござりまするか——」

「寺社奉行に、いちいち言うほどのこともあるまい。言えば、かえってややこしゆうなるということもあるでな」

「では、明日の晩でも……」

「うむ」

間宮林太郎はうなずき、仁左衛門を見やり、

「かような子細じゃ。この櫛、三日ほど預らせてもらうが、かまわぬかな」

そう問うた。

「なんなりと。お妙や進三郎が、どうしてあのような死に方をしたのか。それをつまびらかにしていただけのなら、こちらも願ってもないことでござります……」

仁左衛門は、小さな身体をさらに縮めて頭を下げたのである。

「それから、もうひとつ——」

遊齋が言った。

「なんでしよう」

「亡くなられたお妙さんですが、仁左衛門さんの二度目の……」

「妻でござりました」

「前の奥さまのお名前は、確か——」

「おそのでござります」

「その、おそのさんとの間に生まれた源治郎さん——三年前に亡くなられたとか——」

「はい。その年、御存じのように、江戸中で悪い風邪が流行りましたが、その風邪であっけなく

……

「そうでしたか——」

遊齋はうなずいた。

「その源治郎さんだが、亡くなったのは幾つの時だったかね」

間宮林太郎が訊ねた。

「二十六の時で……」

「二十六と言やあ、いい歳だ。どこかに決まった女でもいたんじゃないかねえのかい？」

「それが、なかなかの奥手で、わたしの方でも、色々世話をやこうとしたんですが、いっこうにその気がないようで——」

「そりゃあ、あった屋さんも、気が気じゃあなかつたらう。店の後継ぎのことも考えなきゃあな  
らねえからなあ——」

「少し、やかましく言いすぎたかもしれません。わたしとしちゃあ、嫁をもらわずとも、生きて  
いてくれさえすればと、今も時々、思うんでござりますが……」

「ああ、こりゃあ悪かった。お役目たあいえ、つまらねえことを思い出させちまったねえ——」  
「いいえ、そのようなことは……」

仁左衛門は、花がしおれるように、また、頭を下げた。

それから、しばらく、遊齋と間宮林太郎はあれこれとありた屋の者たちに訊ねていたのだが、彼らの口から出たのは、あらかじめ、遊齋が耳にしていたことばかりであった。

ほどなくして、遊齋と間宮林太郎は、いとま乞いをして、ありた屋を辞したのであった。

## (二十三)

翌日の昼前——

人形町の鯨長屋にしぎょうじやうなまやに、遊齋あそやうを訪ねてきたのは、進三郎の妹の、光みつであった。

遊齋は、独りひとだった。

訪う女おとなの声がして、遊齋が戸を開けると、そこに光が立っていたのである。

「よかった。もしかしたら、もう、根岸の方へいらっしゃったのかと思っております」

光は、小さく頭を下げた。

他に連れの気配はない。

光は独りでここまでやってきたらしい。

人目を避けたい様子が見てとれたので、

「どうぞ——」

遊齋は、光を中へ招き入れた。

中の様子に、光は、

「まあ——」

と驚きの声をあげ、ふたりが向きあつて座すまでに、多少の時間がかかっている。

「すぐに、もどらねばなりません」

座すなり、光はそう言った。

「嘘について、家を出てまいりました。ここへわたしがやってきたことは、誰も知りません

——」

どのような嘘をついたのかはわからないが、ただ独りでの外出である。あまり時間がないというのは本当のことであろう。

「では、さっそく、御用件をうかがわねばなりませんね」

「昨日の続きです」

その声が硬い。

緊張しているためである。

しかし、その顔色が白い。

緊張のため、血がうまくめぐっていないようであった。

息をつめながら話しているのがわかる。

「続き？」

「身内の恥になることですので、あの場でわたしが申しあげるわけにもいかず、こうして、ひと

りで足を運んできたのです。これからどういふことになるにしろ、このあとわたしがお話し申しあげることが、わたしの口から出たということは、くれぐれも内密にしていたいただきたいのです……」

「もちろんです」

「わたしがここへ来たことも——」

「承知いたしました」

遊齋がうなずくと、光は、ほっとしたように息を吐いた。

「こちらへ来る前に、あなたさまのことは、色々、噂を聞いてまいりました」

「どのような噂です？」

「あの……」

「よい噂ではありませんね」

「いえ」

光は小さく首を振って、

「色々の不思議をなさるそうですね」

頭のよさそうな、直な眼を遊齋に向けた。

「不思議？」

「近所の子供に訊ねました。大人に訊ねるより、よほど、子供の方が信用できますので——」

「おっしゃる通りです」

「子供と一緒に、土の中の魚を釣ったり、首無しの幽霊を捕まえたり……」

「別に、捕まえたわけではありません」

「大事なものは、子供たちが、みんな、あなたさまのことを好いていて、笑顔であなたのことを話してくれたことです——」

「いつも、飴あめをあげているからでしょう」

遊齋の言葉に、光の身体から、少しずつ緊張が抜けてゆく。

「それよりも、お急ぎならば、お話の方を——」

「そうでした」

光はうなずき、座した膝ひざを整えて、二度、三度、迷ったように何度か唾つばを呑み込んでから、

「手短かに申しあげます。わが兄進三郎と、母の妙を殺したのは、嘉兵衛かへえです」  
そう言った。

「嘉兵衛!？」

「ありた屋の番頭の嘉兵衛です」

覚悟を決めたように、光は言った。

「いったい、どういうことでしょうか？」

遊齋は、優しい声音で言った。

「お話し申しあげます」

覚悟を決めたあとの光の顔に、血の色がもどっていた。

( つづく )